

# 大分県現代俳句協会句会報 第2号

【第1回雑詠句会特集号】

令和元年 8月30日発行

## 第1回雑詠句会 Ⅱ 結果発表Ⅱ

締切を延期した第1回雑詠句会には45名135句が寄せられました。多数のご参加ありがとうございます。今回は投句者だけでなく会員全員に選句(7句)と選評を依頼しました。また、見本誌をお送りしている方にも選句と選評をお願いしました。その結果8人の会員外の方からの協力をいただいています。作品上の数字は得点です。(作品は投句到着順)

大神 愛子

1 ②沈丁花日々ふくらみて香り立つ

2 春一步社会一步の孫思う

3 神仏に祈りすがりて朝日さす

あべまさる

4 ①煮凝や鍾乳洞の芸術化

5 ④啓蟄や今だに眠る通信簿

6 坂の町に雪しんとレクイエム

神 慶子

7 ⑥哀しくて夜の羽蟻になつてゆく

8 ②ひらひらと人待ち顔の夏暖簾

9 ⑤憂きことを蛍袋に閉じ込める

河野 輝暉

10 ①貰い物ばかりで年を越す老愁

11 ⑤ヌードめき館パンの膺春立ちぬ

12 恋ざめは常に遙かや根深汁

吾 亦 紅

13 ①帰り花介護認定通知来る

14 ⑥沈黙を指ひたすに蜜柑剥く

15 ③冬堇君の名前が出てこない

下司 正昭

16 ④殉教の鳥が遺産に冬鷗

17 ①「ごさんす！」と一本刀の冬鴉

18 ③十八の安保闘争権の忌

足立 攝

19 ②水の惑星この一瞬の青嵐

20 ⑨黙禱を解けば高鳴る蝉時雨

21 ⑧さよならと言わず夏葉黄嚙んでいる

甲斐千恵子

22 ①車椅子大きく揺れて枯野かな

23 ④日当りの温みを摘みし露の臺

24 ⑤念入りに机を拭いて卒業す

田代 直之

25 ラグビーのワールドカップへ夢をパス

26 ②鍬を振る野良着の背ナに余寒あり

27 ⑤人の輪を少し離れて桜かな

田中 充

28 ⑨生きてまた消えゆく村や土匂う

29 ⑥除染土の背負う軛や五月闇  
30 ②慰霊の日生き来し人の靴の音  
野上 眞司

31 言の葉や日永一日苦吟かな  
32 春一番身通女十八紅蹴出し  
33 ①年輪は生命の証初詣り  
甲斐加代子

34 ⑥春泥の乗り越えられぬ介護かな  
35 ①露味噌の来し方のぞくガラス壺  
36 初音聞き村中さがす吾らの声  
成清 正之

37 ⑧枯野来るひとり死者の帽被り  
38 ⑥朝から目刺し焼いて余生にさからわず  
39 ②春愁をたたんで見ればむらさきくらげ  
瀬川 剛一

40 ⑥他愛なく老いて候春灯  
41 ①元号変わる夏もプチブル左派である  
42 ⑧リラ冷えや齒科のおかしな椅子に寝る  
菅 攝子

43 ②吟ずれば春七草の袖明かり  
44 ③はくれんの吹かれ濃くなる農曆  
45 ①無花果を食めばさざめく昼の月  
井元 扇岳

46 ①稲雀案山子の目力糠に釘  
47 地震の星永遠と無限の反比例  
48 ②振りかえり別れのしぐさつばくらめ  
長谷川正伸

49 ②野茨の棘は仕舞えと令和の日  
50 ①翡翠の水面転がる瑠璃清か

51 万緑やにわか庭師の役所  
河野 則子

52 ④酒蔵に蝶の舞い込む子無し村  
53 ①酒林揺れて祝詞の声若し  
54 ②苦瓜に弱き力の女竹  
難波 瑞枝

55 ⑤田を守るその日その日や墓洗う  
56 ⑥万緑の中で九条傾くか  
57 ②露の世を人皆生きてやがて土  
田口 辰郎

58 ①人間も地球もだんだん燃え尽きる  
59 ①1名月を蹴とばし妻が家出する  
60 ③しゃぼん玉消えて妹還らない  
宮川三保子

61 水差しに大雪の水おぼる月  
62 ③骨肉の闇の深さや春の星  
63 ①揚羽蝶ピンを背中に翔ぶ姿勢  
菅 登貴子

64 ①起きぬけに Pasta 食べたし夏の風  
65 夕立ちに戸惑う時もまた楽し  
66 垣根より見詰める四葩愛らしき  
谷川 彰啓

67 ②秋風と秋思を詰めて旅に出る  
68 ②草むしる小さき己が影を曳き  
69 ⑥椎の実を踏んで余生を確かめる  
安森 範明

70 ③先立たれ独りポツンと春の宵  
71 ⑥言ひ出せぬ言葉を胸に端居かな  
72 ①震へ来し看板書く手夏の山

- 73 夏草や白詰草に道ゆずる 永松左世美
- 74 留守番の夫にもがなと麦茶入れ
- 75 早苗月紋白蝶のランデブー 赤嶺 信子
- 76 ①新札の里にぎわいて風光る
- 77 ③籐椅子に記憶をのせて揺れひとつ
- 78 ①蚊帳の外ホタルが二匹泊まり来る 倉迫 順子
- 79 ⑧宇佐平野掩体壕の初夏の黙
- 80 麦秋に馴染まぬ遺物掩体壕
- 81 ⑤別れとはいつも唐突青葉騒 伊藤 利恵
- 82 ①願かけに行つてもどらぬ家鴨かな
- 83 ⑤つつがなくなたまごはひかる春の土間
- 84 ③こおろこおろと泥のしずくや畦を塗る 有村 王志
- 85 ⑤山脈のごとき師兜太木の芽どき
- 86 ⑤蜘蛛の囀の完璧主義者村消える
- 87 ⑥祖母山麓父にこおろぎの素顔 西峯 峰子
- 88 ②ベーコンのこんがり焼けて夏来る
- 89 ②朝食のバターナイフや新樹光
- 90 ①母の日の便りなき子の恙なや 小野 智輔
- 91 ⑩幸せの形そのまま夏布団
- 92 ⑦尺蠖の測る男女の間かな
- 93 聖五月墮落の酒の神学生 足立 町子
- 94 ④丸き石握れば騒ぐ夏の潮
- 95 ⑪夏服の首透きとおる十五歳
- 96 ①開店でポーカーフエイスになる金魚 松廣由紀子
- 97 ④花の風久女の句碑を抱くこと

- 98 ①霧時雨カブの過ぎゆく由布の朝
- 99 夏祓列に逆ふ童も 福井トミ子
- 100 ①平和の児八月二十日の終戦日
- 101 柿若葉手のひら一ぱい香り立つ
- 102 ⑩田を植えて直会の膳村生きる 宮崎 山景
- 103 永き日の影ふみかげふみかげふまれ
- 104 ①無理をして夜は蛙に嗤われる
- 105 ②八重桜ぎつしり詰まり眠れぬ脳 菅 勲
- 106 ①一聲を残せし雉子の休耕田
- 107 ①嫌われて憂いのこせし泡立草
- 108 ③肥後街道雨に匂へる蕎麦の花 御手洗豊海
- 109 ①さくらさく一年一組前の列
- 110 ⑤生き死にを言うな荒野のねじれ花

- 111 ②ゆうゆうと令和の天に鯉のぼり 白水 風子
- 112 ⑥朝曇り三面鏡の奥ふかし
- 113 ⑥桐一葉母のかほりを拾ひけり
- 114 ⑫中七が拗ねたままなり葱坊主 飯田 幸子
- 115 ③少女らの眸に美ノ海沖總忌
- 116 ②短夜の夢におにぎり握る母
- 117 ④青年の火照り持ち去る夏の風 猿渡 久子
- 118 ①たたかいたのあと六月の湯につかる
- 119 ③白髪もいる炎昼の平和行進
- 120 ③きらめきを追いかけてゆく青田径 鎌倉真由美
- 121 ③せわしなく帯とく君の短き夜
- 122 ⑩甜瓜わって昭和を確かめる

- 123 ⑧青葉騒入所を決めた母といふ 陣野千恵子
- 124 ⑧若き日の父の掌にある桑葚
- 125 ②梅雨空を竜舌蘭が押し上げる
- 126 ②胡瓜揉みまだ平成に生きている 横山 康夫
- 127 老いに死は希望ならんか鯉幟
- 128 ⑥孤独死があり立葵咲きほこり
- 129 ③緑陰に午後のもどろみの車椅子 上田たかし
- 130 あいまいな意志の伝達梅雨の蝶
- 131 ⑨白シャツに千の風入れ生きている
- 132 ④青柿の落ちる村々ゆれ続く 梶原 千代
- 133 ⑦青葉冷え羅漢が着たる石衣
- 134 ⑩近道のなき炎天にさしかかる
- 135 ①一目薬を見つめる右目星涼し

## 選句&選評

今回は、会員外の方を含めて62名の方から選句、選評をいただきました。選評を書いてくださる方が増えて喜んでいきます。作品の発表、選句、選評のサイクルを通じて、会員間の交流と俳句への理解が深まることを望んでいます。言うまでもないことですが、俳句に限らず芸術の価値は、多数決では決まりません。点数や選評はそのことを理解した上での参考にしていただけたら幸いです。

《到着順に掲載》

### 大神 愛子 選

田を植えて直会の膳村生きる

(福井トミ子)

私が高校の頃は農繁期休みがあり、植え手を、11〜12人雇っていました。私は両親や兄、雇った人のお昼や夜のまかないを一人で作っていました。

今は、一人で田植機の時代。人を雇

う事もあります。「直会の膳」が當時を思い出させてくれます。なつかしく、人とのつながりや絆が見えて、とても好きな一句です。

《24・26・40・70・78・102・135》

### 吾亦 紅 選

揚羽蝶。ピンを背中に翔ぶ姿勢

(宮川三保子)

揚羽蝶は標本になっても、まだあこ

がれの空に向って飛び立とうとする。多分魂はあの優美な姿で、今日も大空を翔び回っているのだろうか。

《38・56・63・81・114・116・122》

### 河野 輝暉 選

啓蟄や今だに眠る通信簿

(あべまさる)

自分の学校時代の通信簿を確たる場所に保管している人は少ないだろう。

何かの片付けの折りふと出て来て、しばし往時を懐しむ。つまり通信簿は大切にしている。眠っていた様に存在を忘れていたのだ。これからの将来に役立つものとは言えないが、越冬していた虫が生き返る様に、自分が教室で学んだ生活力の基礎が今の生活と結びついていると言える。啓蟄と唐突な通信簿との取り合わせが発想の巧みさを示し、深い味合いを共振させる。

≪5・37・43・52・91・102・124≫

### 菅 登喜子 選

≪23・44・59・83・84・95・117≫

### 菅 攝子 選

≪27・28・59・91・97・124・131≫

### 足立 攝 選

元号変わる夏もプチブル左派である

(瀬川剛一)

単に元号計算がややこしくなるというだけではない。自分と関係ない天皇家の事情で決められた元号が、私の生活を強制するのだ。そんな生活者の声を、マスコミは付度して少しも伝えない。これで民主主義が機能していると本当に言えるのだろうか……。

しかし違和感はあるが、役所の書類では「令和元年」とちゃんと書く。そんなときもう若くないなあ実感する。プロレタリアートに憧れながらも、長い生活の中ですっかりプチブル根性が身につけてしまった。ああ、だけど心

情的にはまだ左派なのだ。

≪7・11・41・44・84・87・122≫

### 井上 治 選

≪23・24・28・69・71・102・106≫

### 油布 晃 選

せわしなく帯とく君の短き夜

(鎌倉真由美)

一読。エロチシズムと短夜が呼応していて好きです。

≪9・14・55・89・95・121・132≫

### 永松左世美 選

中七が拗ねたままなり葱坊主

(白水風子)

上辺はまじめだが本当はひねくれた考えも持っている私です。

≪30・49・69・79・114・115・131≫

### 坂田 正晴 選

≪7・9・59・62・79・96・122≫

### 神 慶子 選

≪11・20・79・91・105・112・114≫

### 万葉 太郎 選

近道のなき炎天にさしかかる

(梶原千代)

最も好きな句として挙げたい。この句は、私の選句7句の総まとめの句として好きである。私らの前に、それしか行く道のない、それも炎天の道が控えている。

この句が公表される頃、憲法九条の方向も出ているだろうか。炎天の道を進むしかないのである。

≪28・56・79・84・115・131・134≫

### 安森 範明 選

「ござんす！」と一本刀の冬鴉

(下司正昭)

一本刀というと、先ず時代劇の「一本刀の土俵入」を思い浮かべますが、上句でいきなり「ござんす！」の言葉を持って来て、俳句にもこんな斬新な表現があるのかと、驚きました。冬鴉の季語もよく合っていると思います。現代俳句らしく、このような表現が、もっと広まることを期待します。

≪17・23・34・55・81・102・128≫

### 佐藤 綾子 選

≪1・38・46・59・83・104・125≫

### 灘波 瑞枝 選

≪20・30・37・95・102・128・134≫

### 田口 辰郎 選

言ひ出せぬ言葉を胸に端居かな

(安森範明)

人間年齢を重ねるごとに妙にまわりが見えてくる。年相応とか、ここはひとつになつてしまふのであるが、作者の心中にも言いたいことは山程あるのだろう。一方端居という季語はゆつたりのんびりの印象だが今の時代、仲々そうした達成の余生を送れない時代で

ある事も必然で、素のことを端的に嫌みなく表現した秀句と感じた。どうぞ佳句を連発してこの鬱憤を、俳句で晴らしてほしいものである。

≪15・21・42・71・114・119・128≫

### 小野 智輔 選

ひらひらと人待ち顔の夏暖簾

(神 慶子)

風にひらひら揺れるのれんが、まるで人を手招きする如き景が好きです。

≪8・21・53・81・117・121・131≫

### 宮川 三保子 選

ヌードめき餡パンの臍春立ちぬ

(河野輝暉)

ふわふわした餡パンの臍をヌードに見たてた感じが良いと思いました。美的感覚をおもちの男性の作品ではと、楽しい気分になさせていただきました。

時は折しも冬の寒さから抜け出し春を感じる立春を季語にもつてきたところも良いと思いました。日常のさりげない生活の中からの様な作品を生み出す作者に脱帽です。

≪10・16・18・57・71・97・111≫

### 春藤富士子 選

万緑の中で九条傾くか

(灘波瑞枝)

万緑は万全に意味がとれる。冬が去り、春が去り、万緑の夏が来た。時はまさにこの夏の今。準備は着々とできた。政治の安定、生活の安定した今。

まさに好機到来。憲法改正は今でしよう。まさにこの参議院選挙の後、民意を問う憲法九条の改正の発議がなされるであろう。果たして結果はどうなるか。日本の将来がかかっている。

《14・15・40・56・59・91・113》

平田千代子 選

《7・18・19・23・85・113・124》

加藤 征孝 選

生きてまた消えゆく村や土匂う

(田中 充)

過疎の時代いつも目に止まるのは「おくやみ欄」。人ごとではない。自分もその一人なんだと思う。寝る時間や起きる時間まで変わってきている。妻が入院し、独り生活のものだから、一層そう思うのかも知れない。生活のリズムを取り戻すことが出来ないのかも知れない。

《28・34・60・85・86・117・122》

田代 直之 選

甜瓜まわりわって昭和を確かめる

(鎌倉真由美)

元号は平成から令和の時代へと引き継がれ、次第に昭和の時代が遠のいて行く。まだメロンが珍しいころ、甜瓜は昭和の代表的な夏の果物であった。久しぶりに甜瓜を買って食べてみると、若い頃の思い出が次々と甦ってくる。父母のこと、友達のこと、学校のことなどがこの甜瓜の中に凝縮されている

ことに作者は郷愁を覚えながら昭和の記憶を確かめている。

《11・14・28・37・95・122・129》

有村 王志 選

春泥の乗り越えられぬ介護かな

(甲斐加代子)

時事句として今日のこの介護という課題に向き合っていることを評価。子育てを終わって、残された夫婦には老々介護という現実には直面、高齢化の進む日本の社会保障の問題点を露出。上五の春泥には、何とも言えないところの「泥の照り」がその告発に見えてくる。

《22・34・39・42・60・62・69》

松廣由紀子 選

名月を蹴とばし妻が家出する

(田口辰郎)

この句についてクスツと……。中秋の名月は初秋の台風も過ぎて大気も落ち着いた頃。きっと奥様はこらえにこらえて遂に……。

でも私には見えるのです。薄、団子、栗、里芋そして御酒を添えて縁側に……

《52・59・86・95・124・133・134》

宮崎 山景 選

近道のなき炎天にさしかかる

(梶原千代)

炎天を行かねばならないとは辛いものである。しかも他に道は無い。どうしてもこの道を行かねばならない。実

景とも考えられるがそれでは面白くない。作者の心象の吐露と思われる。

「近道のない」どうしても通り抜けなければならぬ道。多分困難な事がそこに待っている。これからどうにかしてこの道を通り抜けようとする作者の強い意思と覚悟というようなものが感じられる。

《37・42・87・92・94・132・134》

あべまさる 選

水の惑星この一瞬の青嵐

(足立 攝)

水星は太陽系の中で、太陽に最も近い惑星だ。日没直後、日の出直前の時間だけに見ることが出来ると云われている。青葉の頃のやや強い風の季語も言い得ている。今この瞬間のかけがえのなさを一瞬に捉えた見事な作品と思う。まさに「俳」だ。

《19・40・77・79・87・131・133》

谷川 彰啓 選

除染土の背負う軛や五月闇

(田中 充)

平成23年3月11日、三陸沖で発生したマグニチュード9の東日本大震災。これにより発生した津波は岩手県から宮城県にかけて大被害をもたらした。この津波により福島第一原子力発電所で炉心溶融が起り、放射線により土壌や農産物を汚染した。八年を経た現在も家に帰れない人が残されている。本句は汚染土への苦悩を五月闇で表現し、

又除染土の背負う「軛」(くびき)の一文字に亡魂追悼の想いと悲愁がこめられた重厚な作品。

《13・26・29・79・108・115・122》

佐藤 珠幸 選

ヌードめき館パンの臍春立ちぬ

(河野輝暉)

上五の「ヌードめき」に、ドキッとさせられ、ビキニのお腹かな？いや、メタボのお腹、なお手には館パンを、持っている姿がかび愉快な句だと思えます。夏の句でも、いけるなあと、感じました。

《7・8・11・38・40・91・121》

河野 則子 選

田を植えて直会なわわいの膳村生きる

(福井トミ子)

田植えを見守ってくれていた田の神様が山へ帰っていく事を「さなぼり」と言う。この時みんな田の神様に感謝し、豊作を祈って、田植の慰労会をする。これが直会である。少子高齢化と言う現実の社会情勢のなか、田植を通して本当の生きると言う事の重さを語っている秀句である。

《45・55・91・102・112・114・117》

御手洗豊海 選

幸せの形そのまま夏布団

(小野智輔)

幸の形はそれぞれあると思いますが、人は人、自分は自分で小さな幸を見つ

けだして人生を生きてゆきたいと思  
います。

《14・20・54・91・131・133・134》

甲斐 順子 選

《9・20・29・82・85・110・131》

田中 充 選

つつがなくたまごはひかる春の土間

(伊藤利恵)

玄関の戸はガラスの一部が切り取  
られ、燕は土間に作った巢に自由に出入  
りできるようになっていた。作者は、  
鴉や雀、蛇、猫などの外敵に親鳥や巢  
が襲われないように十分な注意を払い  
ながら、産まれた卵の様子を暖かく見  
守っている。孵化から巣立ちまでの道  
のりは長い、燕親子はきつと無事に  
乗り切ることだろう。平易な言葉で連  
ねた上五・中七の平仮名書きがやわら  
かく、作者の優しい人柄と燕に対する  
深い愛情が感じられる。

《5・35・49・79・83・92・122》

山本 悦子 選

《9・38・40・68・110・113・114》

瀬川 剛一 選

孤独死があり立葵咲きほこり

(横山康夫)

句意に添って上から読んで行くと、  
7音+10音の破調に読める。作者とし  
ては5音+(2音+5音)+5音の句  
またがりを意識して書いたと思われる。

切れにも工夫があり「孤独死があり」  
と連用形であるが強く切れている。切  
れがあるので「立葵咲きほこり」と連  
用止めにしても余情が残り、読者の胸  
に詩情性が広がる。立葵のそっけない  
が慰めの風情が孤独死と対比的に書か  
れ効果的である。佳句だと思う。

《21・38・39・62・94・95・128》

白水 風子 選

《16・29・87・97・105・125・129》

西峯 峰子 選

夏服の首透きとおる十五歳

(足立町子)

「首透きとおる」に青春のすがすが  
しさ、若さ、清潔さを感じました。自  
分にもそんな時代があったなあと、な  
つかしく、しばし想い出に浸りました。  
《37・43・71・92・95・112・114》

河野 泉 選

生き死にを言うな荒野のねじれ花

(御手洗豊海)

生き死にとねじれ花の取り合せが実  
に異色。そして人間の持つ祈りにも似  
たものを感じる。現実には生き死にを  
感したものでなければ、身に響くもの  
を持たないだろうと思つた。荒野のね  
じれ花、この花がきりきりと舞って輝  
くのは荒野でしかない。その新鮮さは  
いかなる概念も受け入れてはくれず、  
心をうばわれる。  
私も何度も出逢つた光景であるねじ

れ花が「私を見て元気になつて下さい  
よ」と云っているみたいで、それだけ  
で明るい視野がそこにある。

《27・56・83・85・102・110・124》

児玉 利子 選

《16・40・79・102・123・133・134》

赤嶺 信子 選

《48・88・95・102・116・123・124》

足立 町子 選

《20・37・42・59・91・123・134》

梶原 千代 選

《29・34・56・59・69・86・95》

中山 宙虫 選

丸き石握れば騒ぐ夏の潮

(足立町子)

水があるところ、なんとなく石を握  
ると無意識に投げ込みたくなる。そん  
な衝動がなつかしい。少し目線を変え  
ると、波風が立たない日本社会にある  
小さなさざなみみたいなものが読み取  
れて二重に面白い  
《14・21・28・37・42・68・94》

陣野千恵子 選

沈黙を指ひたすらに蜜柑剥く

(吾亦紅)

大学一年の冬、四畳半の狭い部屋で  
異性と二人きりで息が詰まるような思  
いをしたことを思い出しました。沈黙

が続き、カセットをかけて、蜜柑を何  
個も食べていたあの夜。

上五の「沈黙を」の助詞「を」がと  
ても効いています。また、中七に「指  
ひたすらに」とあるのが、沈黙に耐え  
かね、殆ど無意識にみかんをむいてい  
る情景が浮かびます。指がクローズアッ  
プされて、うまいと思います。

《7・14・59・77・89・107・123》

横山 康夫 選

《24・27・38・95・97・112・133》

吉田 素子 選

《20・27・52・55・81・114・128》

田中 葉月 選

《21・42・69・83・109・112・123》

菅 勲 選

《16・24・28・57・86・110・124》

上田たかし 選

甜瓜まぐりわつて昭和を確かめる

(鎌倉真由美)

百姓とはよく言つたもので、地方の  
農村部に暮らしていると、次から次へ  
といういろいろな仕事を追ってくる。大き  
な仕事は当然として、三十分から一時  
間程度で片付く小さな仕事の多いこと。  
その日は、これらを三つも五つも頭に入  
れておいて作業にかかる。都市部の  
豪華(高価)マンション暮らしの退職  
者はすることがなくて大変らしいが、

こちらは大変だ。両者の中間位の暮らしがよいのだろうが、などと現代社会の有り様を考える。

《21・29・37・77・94・95・122》

### 倉迫 順子 選

山脈のごとき師兜太木の芽どき

(有村王志)

金子兜太氏を山脈と捉えた。氏は豪快なイメージで私の所属していた俳句結社「港」の節目のイベントには必ず主賓として来て下さっていた。宇多喜代子氏と港の女性会員が並んで写真撮っている、横からひよいと顔を出し、「一緒に」と言うような茶目つけと、サービス精神と、存在感のある山のようにどっしりとした巨大さを感じていたが、山脈とは！！比喩のすごさを思い、季語の木の芽どきに兜太氏と作者の貴重な思い出を想う。

《24・33・67・113・119・123・124》

### 下司 正昭 選

《70・71・72・123・132》

### 野上 眞司 選

田を守るその日その日や墓洗う

(難波瑞枝)

先祖の開いた田畑を日夜守りつつ後世に託すその心情。この貴重な地方の日本の原風景を、今や限界集落と言う。先人に感謝しつつも現実は厳しい。が作物を創る喜びは何事にも変えがたい。同質の「生きてまた消えゆく村や土

匂う」「田を植えて直会の膳村生きる」の二句にも強く感じる農の歴史だ！

《28・54・55・56・92・102・113》

### 伊藤 利恵 選

《15・44・59・87・112・133・134》

### 鎌倉真由美 選

ヌードめき餡パンの臍春立ちぬ

(河野輝暉)

煩惱が際立っていく春、パン屋に並ぶパンの中に、ゆるやかな曲線とキュートにくぼんだ臍のある餡パン。ヌードめくとよくぞ言ってくれました。同感です。餡パンはこの上なくやさしいのです。母のように。

しかし春の日差しの中では、時としてあやしくささやくのです「私を食べべ」と。

《5・11・21・59・88・92・114》

### 成清正之 選

十八の安保闘争権の忌

(下司正昭)

一九五八年(昭三三年)に始まった「日米安全保障条約の改定」に反対して展開された国民運動を「安保闘争」というが、この運動が最高潮に達した一九六〇年は、与党のみで強行採決したことに革新陣営・市民団体・学生が国会に抗議デモを連日行なった。このデモに参加していた十八歳の大学生・権(かんば)美智子さんは、五月十九日の行動に巻き込まれて還らぬ人となつ

た。この条約発効の日に二十三日には岸首相は辞任し、内閣は総辞職した。平和を守ることの厳しさを痛感させる一句である。

《18・42・70・87・118・119・129》

### 時松由美子 選

《5・9・34・100・113・114・126》

### 夢野はる香 選

生き死にを言うな荒野のねじれ花

(御手洗豊海)

「言うな」この強い口調に思いがこもっている。言ったところで「生きる」も「死ぬ」も神のみぞ知ることであり、自分の意志ではどうにもならない。どうにもならないことを口にしたって仕方が無い。荒野に咲くねじれ花のように直向きで可憐であれ。ねじれ花が天国への階段のようにも思えてくるが、この気迫に励まされる。

《34・91・92・110・126・128・134》

### 飯田幸子 選

振りかえり別れのしぐさつばくらめ

(井元扇岳)

秋になりつばめが南へ旅立っていく季節になった。ふと見ると電線に止まっていた一羽のつばめが作者の方を振りむいて、びよこんと首を下げ飛び立っていったが、まるでさようならと告げたようだった。思わず「来年もまた帰っておいで」と念じた作者ではなかったのでは。季節の移ろいをつばめの旅立

ちを通して詩情ゆたかに詠んだとても好きな句でした。

《20・48・67・69・81・123・131》

### 鎌田 建二 選

幸せの形そのまま夏布団

(小野智輔)

家族が一つの部屋で布団を敷き眠る光景が浮かびます。おそらくお父さんとお母さんの間に幼子が眠っているのでしょう。そこは夏布団、軽く薄いもの。体に巻きついたり、足元に寄せられていたり、あまり布団の原形はないでしょう。その形を見た作者(お父さんかお母さん)は、何気ないこの幼子と布団の光景に普通の生活を送る幸せを感じているのではないのでしょうか。ほのぼのとして気持ちが安らぐ句だと思えます。

《20・21・28・60・91・92・122》

### 久枝花城 選

翡翠の水面転がる瑠璃清か

(長谷川正伸)

見事な写生句だと思ふ。敏捷な小鳥のカワセミが餌の小魚を探して水面をかすめ飛び様子を、「水面転がる」としたことに先ず感心した。そして、その鮮やかな瑠璃色は、作者の眼裏にいつまでもくつきりと残った。

写生句はともすれば、そうですか、で終わる平凡な句になりがちだが、この句はそこを突き抜けた。動きに高速感があるのが、突き抜けさせた。そし

て、難しい漢字熟語が二組あるのも、格調を高めさせている。

≪42・50・52・86・98・111・134≫

小野 宣子 選

≪7・27・29・81・108・114・131≫

福井トミ子 選

甜瓜わって昭和を確かめる

(鎌倉真由美)

86 甜瓜わって昭和を確かめる

永く続いた昭和の時代、戦争に始まり終戦を味わった日本国である。赤紙一枚で軍服に身を包み八幡様の石段の上に並んだ方々の面影は今でも忘れる

# 第1回雑詠句会 互選高得点句

(2点以上)

ことは出来ない。

泣くことも笑うことも出来ない時代だった。甜瓜は家で作った子供に与える最高の食べ物。現在の豊かな食文化と違って、昭和の想い出がぎつりつまっている甜瓜。確かめるにはあまりにも大きな傷である。平成から令和へと時代はすすむ。昔をふり返って見るも良し、甜瓜は知っている。

≪4・64・85・114・122・132・133≫

森山 秀子 選

言ひ出せぬ言葉を胸に端居かな

(安森範明)

「言ひ出せぬ」を考えて見る。それ

と合わせて「端居」も。端居から受ける感じはどうしても「さびしさ」である。しかも現在ではあまり見られない季語でもある。

そこから「言ひ出せぬ」と「端居」が繋がっていきそうな気がした。縁先で涼をとる老人が家人に思うままに言えぬ胸のつまりを感じ、現代の高齢者の縮図を見たような気がする。参考に「いふまじき言葉を胸に端居かな(星野立子)」がある。「言ひ出せぬ」と「言ふまじき」の違いがあるのではないか。

≪1・20・58・71・76・90・108≫

青葉騒入所を決めた母といる

鎌倉真由美

若き日の父の掌にある桑葚

陣野千恵子

(7点句 ※2句)

尺蠖の測る男女の間かな

小野 智輔

青葉冷え羅漢が着たる石衣

梶原 千代

(6点句 ※14句)

哀しくて夜の羽蟻になつてゆく

神 慶子

沈黙を指ひたすらに蜜柑剥く

吾 亦 紅

除染土の背負う軛や五月闇

田中 充

春泥の乗り越えられぬ介護かな

甲斐加代子

朝から目刺し焼いて余生にさからわず

成清 正之

他愛なく老いて候春灯

瀬川 剛一

万緑の中で九条傾くか

難波 瑞枝

椎の実を踏んで余生を確かめる

谷川 彰啓

言ひ出せぬ言葉を胸に端居かな

安森 範明

別れとはいつも唐突青葉騒

倉迫 順子

白シャツに千の風入れ生きている

上田たかし

(8点句 ※6句)

さよならと言わず夏菜黄噛んでいる

足立 攝

枯野来るひとりは死者の帽被り

成清 正之

リラ冷えや齒科のおかしな椅子に寝る

瀬川 剛一

宇佐平野掩体壕の初夏の黙

倉迫 順子

(12点句)

中七が拗ねたままなり葱坊主

白水 風子

(11点句 ※2句)

名月を蹴とばし妻が家出する

田口 辰郎

夏服の首透きとおる十五歳

足立 町子

(10点句 ※4句)

幸せの形そのまま夏布団

小野 智輔

祖母山麓父にこおろぎの素顔

有村 王志

朝曇り三面鏡の奥ふかし

白水 風子

桐一葉母のかほりを拾ひけり

白水 風子

孤独死があり立葵咲きほこり

横山 康夫

〔5点句 ※9句〕

憂きことを蛭袋に閉じ込める

神 慶子

ヌードめき餡パンの臍春立ちぬ

河野 輝暉

念入りに机を拭いて卒業す

甲斐千恵子

人の輪を少し離れて桜かな

田代 直之

田を守るその日その日や墓洗う

難波 瑞枝

つつがなくなたまごはひかる春の土間

伊藤 利恵

山脈のごとき師兜太木の芽どき

有村 王志

蜘蛛の囀の完璧主義者村消える

有村 王志

生き死にを言うな荒野のねじれ花

御手洗豊海

〔4点句 ※8句〕

啓蟄や今だに眠る通信簿

あべまさる

殉教の島が遺産に冬鷗

下司 正昭

日当りの温みを摘みし露の臺

甲斐千恵子

酒蔵に蝶の舞い込む子無し村

河野 則子

丸き石握れば騒ぐ夏の潮

足立 町子

花の風久女の句碑を抱くごと

松廣由紀子

青年の火照り持ち去る夏の風

飯田 幸子

青柿の落ちる村々ゆれ続く

上田たかし

〔3点句 ※13句〕

冬菫君の名前が出てこない

吾 亦 紅

十八の安保闘争樺の忌

下司 正昭

はくれんの吹かれ濃くなる農暦

菅 攝子

しゃぼん玉消えて妹還らない

田口 辰郎

骨肉の闇の深さや春の星

宮川三保子

先立たれ独りポツンと春の宵

安森 範明

籐椅子に記憶をのせて揺れひとつ

赤嶺 信子

こおろこおろと泥のしずくや畦を塗る

伊藤 利恵

肥後街道雨に匂へる蕎麦の花

菅 勲

少女らの眸に美ノ海沖縄忌

飯田 幸子

白髪もいる炎昼の平和行進

猿渡 久子

せわしなく帯とく君の短き夜

鎌倉真由美

緑陰に午後のまどみの車椅子

横山 康夫

〔2点句 ※20句〕

沈丁花日々ふくらみて香り立つ

大神 愛子

ひらひらと人待ち顔の夏暖簾

神 慶子

水の惑星この一瞬の青風

足立 攝

鍬を振る野良着の背中に余寒あり

田代 直之

慰霊の日生き来し人の靴の音

田中 充

春愁をたたんで見ればむらさきくらげ

成清 正之

吟ずれば春七草の袖明かり

菅 攝子

振りかえり別れのしぐさつばくらめ

井元 扇岳

野茨の棘は仕舞えと令和の日

長谷川正伸

苦瓜に弱き力の女竹

河野 則子

露の世を人皆生きてやがて土

難波 瑞枝

秋風と秋思を詰めて旅に出る

谷川 彰啓

草むしる小さき己が影を曳き

谷川 彰啓

ベーコンのこんがり焼けて夏来る

西峯 峰子

朝食のバターナイフや新樹光

西峯 峰子

八重桜ぎつしり詰まり眠れぬ脳

宮崎 山景

ゆうゆうと令和の天に鯉のぼり

御手洗豊海

短夜の夢におにぎり握る母

飯田 幸子

梅雨空を竜舌蘭が押し上げる

陣野千恵子

胡瓜揉みまだ平成に生きている

陣野千恵子

※第2回雑詠句会の作品を募集します

締切は10月1日(火)消印有効

一人三句を事務局まで



# 大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村 王志

《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝 方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL:https://blogs.yahoo.co.jp/nakamusii5011

E-Mail: info@e-ada.net